論　文　の　和　文　要　旨	
論文題目	ベトナム戦争期のベトナム労働党による人民動員宣伝 －党機関紙『ニャンザン』掲載写真の宣伝メッセージ論的研究－
氏　　名	金（きん）　成（そん）　蘭（らん）

1. 問題意識

抗仏戦争後、民族団結から階級重視への態度変化によって生じた摩擦を経験している党にとって、戦争によって強いられた民族団結への態度変化は、宣伝の成否を左右する一つである党の信頼にかかわる問題であったはずである。よって、ベトナム戦争期の宣伝工作は重要な課題であったと考えられる。さらに、これまで戦争・社会主義建設への動員の原動力とされてきた愛国主義の伝統が戦争の必要性によって作られたことであるということを考えると、人民動員がどのように行われていたのかという疑問が起きる。よって本論ではベトナム戦争期、党によって行われた人民動員宣伝を見ていきたい。

2.『ニャンザン』紙掲載の写真を手がかりとする理由

当時の宣伝を研究するためには、未だに宣伝関連文献の多くが非公開になっているため、実際に普及されていた宣伝物のメッセージ分析に頼らざるを得ない状況である。当時の宣伝媒体には、宣伝媒体の劣悪さや巡回に頼っていたこと、「識字率」の低さなどから 1.分かりやすさ 2. 簡略さ 3. 普及性が求められた。さらに、アメリカで戦争に大きな影響力を与えていた一つが視覚媒体による報道であったことを踏まえ、本論では、それらの条件を充足させる上、「実写」として「実証」の力を持つ写真を、中でも当時写真の代表的な普及ルートであった『ニャンザン』紙掲載写真を中心に、メッセージ論の立場から、党の人民動員宣伝を見ていくことにしたい。

3. 掲載写真の変化による「ベトナム戦争期」区分への試み

新聞 1 面にはその時最も重要な話題が掲載される。よって本論では、1 面に掲載された写真の変化を中心に「ベトナム戦争期」の区分を試みた。その結果、従来のベトナム戦争時

期区分とは少しズレが見えていることが分かった。まず、戦争が公式化されたのが 1965 年 3 月の党第 3 期中央委員会第 11 回会議であったのに対し、『ニャンザン』紙では 1965 年 2 月から 1 面を戦争関連写真が飾り、戦争の始まりを知らせていた。また、1 次北爆が 1968 年まで続いていたのに対し、1968 年の『ニャンザン』紙にはテト攻勢やケサン戦での戦勝写真が主になり、まるで 1 次北爆が 1967 年で終わっているような印象が感じられる。1972 年 3 月に行われた春季大攻勢に向けて、ベトナムの「強さ」が強調され始めたのも 1971 年 5 月と、はるかに早くから攻勢に向けての「心」の準備が呼びかけられていた。そして、人民に終戦が知らされたのも、1973 年 1 月 25 日付『ニャンザン』紙に掲載された協定締結に向かう外相の写真が初めてで、実際停戦協定締結が 1973 年 1 月 8 日であったことに比べ、日にちがずれていたことが分かる。このようなズレは、情報追求及び問題解決者としての性向、恒常性、集団成員としての性向という人間の基本性向を上手に利用した宣伝手法として考えられる。従って、写真変化による宣伝面での「ベトナム戦争期」は 1965 年 2 月から 1973 年 1 月までと見ることが出来る。

4. 「豊かさ」の社会主義

社会主義建設への参加は主に「豊かさ」をもって呼びかけられた。しかし、戦争前の段階で強調されていた社会主義の「豊かさ」が、主に食べ物の豊富さを持って見せられていたのとは違って、戦争期には食糧だけではなく、教育、医療、機械化による工業化など、より多様な方面での「発展」を持って「豊かに」なっていることが見せられている。

さらに、戦争により思うがままに発展を成し遂げられなかった党は、他の社会主義国家での発展状況を見せることによって、社会主義建設によるベトナムの「発展」を「約束」していた。即ち、社会主義というものの持つ「普遍的」な「豊かさへの約束」を持って、ベトナムでも社会主義建設によって「豊かさ」が実現できることを「約束」していたといえる。

そして、戦争前の段階ではもっぱら社会主義によって享受できる「豊かさ」だけが強調されていたのとは違って、戦争期には、その「豊かさ」という「権利」を享受するためには、「自分の努力」という「義務」を払うべきであるという「主人意識」が強調されるようになったのも一つの違いである。

5. 正義の戦争・勝利の戦争

戦争への参加は、正義の戦争であること、人間として当為の戦争であること、そして必ず勝つ戦争であることが見せられることによって呼びかけられていた。まず、無辜な人が殺されていることを見せ、敵が「悪者」であることを証明すると共に、この戦争が世界各国、さらにはアメリカ自国民からも反対されていることを見せ、敵の「誤」が証明されている。さらに、残忍に殺された人々を、「子供」や「母」、「妻」のように、「家族」を連想させる表象を使うことによって、人々の戦争参加を訴えていた。これは恐怖を恐れ、安全

になりたいと願う人間の心理と人々の同情心に訴えることによって参加を呼びかける宣伝手法として考えられる。

それからベトナム人民にはもっぱら北ベトナムの「勝利」とアメリカの「敗北」だけが見せられ、「弱くて小さな国」という外国向けのイメージとは違う「強くて大きな国」としてのベトナムがベトナム人民には見せられていたことが分かる。

6. 女性・子供の表象

戦争期、人民に求められていたもう一つは党に対する信頼であった。本論では党に対する信頼が何を持って求められていたのかを、人民と党がそれぞれどのように表現され、人民と党の関係はどのように描かれていたのかを通じて見ている。特に女性や子供のように「典型」的に使われている表象に注目し、それぞれの描き方を見た。

まず、収穫・教育・医療など社会主義の「豊かさ」を見せる場面で使われた女性の表象は、「豊作」の意味合いとしてだけではなく、社会主義によって「解放」された人民の姿を代弁している。即ち、階級と性別による「2重の抑圧」下に置かれ、同じ「階級」の中でもより厳しい抑圧下に置かれていた女性が、人間としての権利を享受する姿を通じて、社会主義による「解放」をより強調していることが分かる。また、戦争の被害者として多く見られる女性や子供の表象はその「弱さ」と「家族」を連想させることによって、非人道的な敵の残忍さをより際立たせている。しかし、「弱い」女性が勇敢に戦う「戦士」として描かれることによって、見た目からは分からない、中に潜んでいる本当の「強さ」がより強調されていることが分かる。これらの女性の姿は、単に女性に限られた表現というよりも、ベトナム人民を代弁する表象として、ベトナム人民の持つべき望ましい態度を提示する役割を果たしている。実際、軍と人民の関係を表現する際にも、人民には殆ど女性の表象が使われていた。

このような戦争での女性表象の多用はそれほど珍しいことではない。しかし、これまでの戦争での女性が性別による伝統的な社会的役割分担と変わらない「支える」立場としてしか表現されておらず、「戦士」として描かれる場合も男性化された女戦士であったのに比べ、ベトナム戦争では、その数は少ないとしても、「支える」女性だけではなく、より積極的に「戦う」女性も描かれていたことが分かる。

このような違いは、男女の平等をも一つの強みとして掲げていた社会主義によることとしても考えられるが、前述したように、ベトナムでの女性の表象が、単に戦時期の望ましい女性像としてだけではなく、ベトナム人民全体を代弁する表象として、望ましい「人民像」を提示するために使われていたこともひとつの理由として考えられる。

7. 表象としてのホー・チ・ミン

党のイメージを代弁していたのは、ホー・チ・ミンや軍といった「守る」立場にある表象である。ホー・チ・ミンや軍は民と「家族」のような関係として表現されることによっ

て、党と人民の関係は「親密さ」が強調されていたことが分かる。しかし、「ホーおじさん」として描かれていたホー・チ・ミンは、死後、社会主義革命家として、人民に「恩恵」をもたらした「よき指導者」として描かれるようになる。それによって、社会主義・党は人民に「恩恵」をもたらす存在となり、これまで「親密さ」をもって信頼を求めていた党は、ホー・チ・ミンの死後は、党が社会主義によって「恩恵」をもたらす存在であることを、ホー・チ・ミンの「過去の業績」を持って喚起させることによって、今後も党が人民によいことをもたらすであろうことに対する信頼を求めていたと見ることが出来る。

8. 見えていないこと

ベトナム戦争期の宣伝で注目すべきもう一つは、ベトナムの「敗戦」の姿、外国からの援助状況、1965年からの中国での文化大革命や1969年珍宝島での中ソ衝突、1972年2月に実現されたアメリカ・ニクソン大統領の中国訪問などのような、党の信頼を害する恐れのある出来事や、土地改革時のような階級闘争的性格をはっきり現している写真などのように、宣伝に悪影響を与える恐れのある情報が全く見せられていなかったことである。何かを伝えないことも一つのメッセージであることを考えると、党の態度変化にもかかわらず人民に戦争と社会主義建設への参加を呼びかけることが出来たのは、「豊かさ」や戦争の「正当性」だけではなく、むしろ「見えていない部分」があったことによってもう一つの「現実」が作り出されたこと、それによって党に対する信頼を人民に持たせ、アメリカを「敵」として「他者化」することがより可能であったことによるのではないだろうか。

このように、敵を「他者化」すること、情報の偏狭性や「正誤」を論じる二分論的な考え方は、他の戦争宣伝でも見える共通の特徴である。このように、「正義の勝利」としてのイメージが大きいベトナム戦争においても、他の戦争同様の特徴が現れていることから分かることは、ベトナム共産党も「嘘」をついていたという単純な事実ではなく、誰もが「やむを得ず何かを隠し」、それを「正当化」せざるを得なくさせる事情を生み出す「戦争」というものの持つ弊害である。

即ち、どれほど「正当」な目的を持っているとはいえ、戦争によって「やむをえず」発生する一つに「悲しみ」がある以上、戦争も戦争での情報の統制も、これ以上「やむをえない」という理由から正当化されてはならない。「正誤」を論じ、戦うべき「当為性」が語られる前に務めるべき大事なのは「正誤」をつけるためが故に「誰」かの命を要求しないことであるのではないだろうか。